「たった一人のために」
マルコによる福音書 5 章 1－20 節

今日の「子どもの日・花の日」の礼拝堂には、多種多様な花が飾られています。大きな花、小さな花、目立つ花、目立たない花。花を育てる人は「この花はいらない」とは決して考えず、一つひとつを大切にします。神さまの愛も同じです。神さまは大勢の人々を愛されると同時に、私たち一人ひとりを個別に愛し、決して「たった一人」のことも忘れることはありません。今日の聖書は、そのことを教えてくれるお話です。

イエスさまとお弟子さんたちは、命の危険を感じるほどの激しい嵐の中、ガリラヤ湖を渡って異邦人の土地ゲラサへと向かいました。お弟子さんたちには、わざわざ行く必要のない場所に思えたかもしれません。ですが、イエスさまが嵐を越えてまで向かわれたのは、そこに「一人の苦しむ人」がいたからです。その人は墓場に住み、叫び続け、自らを傷つけ、誰にも救われず社会から孤立していました。この姿は、学校や職場で悩みを抱え、「誰にも分かってもらえない」と孤独に苦しむ現代の私たちの姿と重なります。

ここで大切なのは、この人がイエスさまを捜したのではないという点です。イエスさまの方から彼を捜して嵐を越え、誰も近づかない場所へ来てくださったのです。神さまにとって彼は、代わりのきかない大切な一人だったからです。

イエスさまによって男は正気を取り戻しましたが、代わりに二千匹の豚の群れが湖に溺れて死んでしまいました。町の人々は、諦められていた一人の人間が人生を取り戻した喜びよりも、失った財産の大きさに目を向け、イエスさまに「ここから出て行ってほしい」と願いました。私たちも、与えられた恵みより失ったものばかりを数えてしまいがちです。現代社会も大きな成果や数字に目を奪われ、片隅で苦しむ一人の存在を見落としやすいものです。しかし、イエスさまは二千匹の豚という大きな数字よりも、代わりのきかない「その人」を見ておられます。誰も気づかなくても、神さまはあなたの苦しみを知り、「あなたは大切だ」と語りかけてくださいます。

さらに神さまは、ただ言葉だけで「大切だ」と言うのではありません。本当に大切だからこそ、失われた私たちを取り戻すために、独り子イエス・キリストの命という、あまりにも大きな代価を十字架の上で払ってくださいました。

イエスさまが嵐を越え、誰も行かない場所へ向かい、最後に十字架にまで進まれたのは、私たちが自分の力では神さまのもとへ帰れない者だからです。イエスさまが命をかけて捜しに行かれた「たった一人」とは、他ならぬ、今ここにいる「私たち」です。

嵐や十字架の苦しみを越えて届けられるその確かな愛が、今日も私たち一人ひとりに注がれています。